

国語 4 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

4

竹内さんはスピーチで、自分が読んだ文学作品について、冒頭を音読しながら紹介しようと考えています。竹内さんが紹介しようとしている文学作品の冒頭を取り上げた次の一から三までの各問に答えなさい。

一 次の——線部①から③までの漢字の正しい読みをひらがなでいねいに書きなさい。

それは、寒い日でありました。指のさきも、鼻の頭も、赤くなるような寒い日でありました。吉雄は、いつものように、朝早くから起きました。

「お母さん、寒い日ですね。」と、こあいさつをして震えていました。

「火鉢に、火がとつてあるから、おあんなさい。」とお母さんは、もう、朝のご飯の支度をしながらいわれました。

吉雄は、火鉢の前にいって、すわって手を暖めました。家の外には、風が吹いていました。

(小川未明「ある日の先生と子供」による)

二 次の——線部①と——線部②をそれぞれ現代仮名遣いに直し、全てひらがなでいねいに書きなさい。

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して日当りのよささうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。

(夏目漱石「門」による)

三 次の——線部①から④までのうち、動作をしている人(もの)が異なるものを一つ選びなさい。

(井上靖「しろばんば」による。)

(井上靖「しろばんば」による。)



竹内さん

1. 出題の趣旨

- ・ 文脈に即して漢字を正しく読むこと
- ・ 歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むこと
- ・ 文の成分の照応について理解すること

漢字の指導については、社会生活や他教科等の学習における使用や、読書活動の充実に資するため、中学校3年間を通して常用漢字の大体を読めるようにするとともに、学年別漢字配当表に配当された漢字を使い慣れるようにする必要がある。漢字を読む能力としては、漢字一字一字の音訓を理解し、語句として、話や文章の中において文脈に即して意味や用法を理解しながら読むことができるようにすることが求められる。そのため、教科書を読むことや読書を通して、漢字の読みの習熟と応用を図ることが大切である。また、字形と音訓、意味と用法、語の成り立ち、熟語の構成などについて必要に応じて指導し、例えば、漢字の構成要素である「へん」や「つくり」などに注目して、読みを類推することができるように指導することも大切である。

また、歴史的仮名遣いなどの文語のきまりについては、生徒の興味・関心を大切にしながら、教材に即して指導したり、必要があれば取り立てて指導したりすることが大切である。古典を取り上げる際には、繰り返し音読して、生徒自らが古典特有のリズムに気付くことを重視し、五音、七音の繰り返しなどの特徴について理解を深める必要がある。また、古典だけでなく、身近な文章の中にある歴史的仮名遣いについて、言葉の意味を考えながら正しく読むことを通して、文や文章についての理解を深めることも重要である。

文の中の文の成分の順序や照応、文の構成を考えることについては、主語、述語、修飾語などの並ぶ順序や、主語と述語の照応、修飾語と被修飾語の照応などについて理解を深めるとともに、語順や語の照応によって表現がどのように変わってくるかを様々な文型について考えさせ、文の成分の順序や照応に関心をもたせることが大切である。

このような〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)に示された「ア 伝統的な言語文化に関する事項」、「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」、「ウ 漢字に関する事項」については、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」及び「C 読むこと」の指導を通して、それぞれの事項について指導することが大切である。

本問では、スピーチで、自分が読んだ文学作品について、冒頭を音読しながら紹介するための準備を行っている場面を設定した。文脈に即して漢字を正しく読んだり、文の成分の照応を考えたりすることに加え、歴史的仮名遣いが用いられている作品について、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことを求めている。

2. 調査問題の活用にあたって

設問二 の趣旨を生かした学習指導の工夫

■学習指導要領における領域・内容

〔第1学年〕 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)ア

(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。

(1) 言語活動を通した学習指導の工夫について

○ 第1学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)ア(ア)については、「C 読むこと」の学習を通して、歴史的仮名遣いについて指導したり、歴史的仮名遣いについての知識及び技能を活用して多様な文章を読むように指導したりすることも考えられる。その際、単に歴史的仮名遣いの読み方を意識するだけでなく、文脈に即して語句の意味を考えるように指導することが大切である。また、文章を音読したり朗読したりすることを通して理解を深めるように指導することも重要である。

(2) 授業アイディア例について

○ 授業アイディア例Ⅰでは、「竹内さん」がスピーチで、自分が読んだ文学作品について、冒頭を音読しながら紹介するための準備を行っているという本問の場面設定を活用した授業アイディア例を示した。夏目漱石の「門」の冒頭部分の続きを音読することを通して、歴史的仮名遣いに留意しながら文章を読み、文脈の中における語句の効果的な使い方について理解する力を身に付けることをねらいとする。

3. 出典等

設問一は、小川未明「ある日の先生と子供」(『定本小川未明童話全集4』1977年2月 講談社)による。設問二及び授業アイディア例Ⅰは、夏目金之助「門」(『定本 漱石全集 第六巻』2017年5月 岩波書店)による。設問三は、井上靖『しろばんば』(2002年4月 偕成社)による。

授業アイディア例Ⅰ

【指導のねらい】

歴史的仮名遣いに留意しながら文章を読み、文脈の中における語句の効果的な使い方について理解することができるようにする。

【授業アイディア例】

教材

● 令和2年度全国学力・学習状況調査【中学校】国語4二

学習の流れ

第1時、第2時

① 学習の見通しをもつ。



教師

歴史的仮名遣いに気を付けながら、夏目漱石の「門」を声に出して読んでみましょう。また、語句の使い方などの表現上の工夫について考えましょう。

② これまでに学習した歴史的仮名遣いを振り返る。

③ 教師の音読を手掛かりに、設問二に示された「門」の冒頭の歴史的仮名遣いを確認する。

④ 「門」の冒頭の続きを各自で音読し、歴史的仮名遣いが用いられている部分に線を引く。

【「門」の冒頭とその続きの一部】 ※ —— は、生徒が引いた線。

(冒頭)
宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して日当りのよささうな所へ気楽に胡坐をかいて見たが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。

(冒頭の続き)
秋日和と名のつく程の上天気なので、往來を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、明らかに聞えて来る。肘枕をして軒から上を見上ると、綺麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。其空が自分の寝てゐる縁側の窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。たまの日曜に斯うして緩くり空を見るだけでも大分違ふなど思ひながら、眉を寄せて、ぎらぎらする日を少時見詰めてゐたが、眩しくなつたので、今度はぐるりと寝返りをして障子の方を向いた。

※ 生徒の実態等に即して、更に続きの文章を示すことも考えられる。

⑤ ペアで読みを確認する。

【確認している場面の例】



「斯うして」はそのまま読むと「かうして」だけど、どういう意味なのかな。

「斯うして」は、「こうして」と読むよ。場面の様子を想像して言葉の意味を考えながら読むとよいのではないかな。



⑥ 文章を読み返し、語句の用い方がどのような効果を生んでいるかを考え、気付いたことを各自でノートに書く。

⑦ ⑥でノートに書いたことを全体で交流する。

【交流している場面の例】



「下駄の響」という表現があり，単に「下駄の音」と表現するよりも町の静かな様子が伝わってくると思いました。

「ぎらぎらする日」を「見詰めて」いる「宗助」の表情を「眉を寄せて」と表現していて，眩しさに目を細めている様子が具体的に想像できました。



⑧ 学習を振り返る。

【活用のポイント】

- 本授業アイデア例は，第3学年「C 読むこと」(1)アを指導することを想定した学習の流れを示している。設問二で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には，②～⑤で，これまでに学習したことを想起し，文語のきまりなどに留意しながら読むように指導するとよい。第3学年の評価に当たっては，②～⑦で，文脈の中における語句の効果的な使い方を理解しているかについて，ノートに書いた内容や発言の様子などを基にして評価することが考えられる。

【他学年で活用する際のポイント】

- 第1学年で，設問二で取り上げた指導事項について指導する場合には，②～⑤を中心に授業を行い，ノートに書いた内容や音読の様子などを基にして評価することが考えられる。
- 第2学年で，設問二で取り上げた指導事項の定着に課題が見られる場合には，②～⑤を中心に授業を行うとよい。また，第2学年「C 読むこと」(1)アの指導事項を取り上げ，心情を表す語句などについて考えるように指導し，ノートに書いた内容や発言の様子などを基にして評価することが考えられる。